

見沼たんぼの歴史

地域人ネットワーク

1 「見沼たんぼ」とは

私達は今「見沼たんぼ」にいます。この「見沼たんぼ」とはいったい何なのでしょう。

実は「見沼たんぼ」は江戸時代の中頃に、新田として誕生しました。新田とは、文字通り新たな田んぼのことです。ではなぜ新たな田んぼが生まれたのでしょうか。これから見沼の歴史をみていきましょう。

2 江戸幕府がおかれた頃の関東・武蔵野

1590年、関東を支配していた小田原を本拠地とする北条氏に代わり、徳川家康が天下統一を成し遂げた豊臣秀吉により、関東（関八州）に移されました。かつて太田道灌が築いた江戸城の場所に家康は移って、江戸の町作り・関東支配を始めました。

今の私達は、その頃の江戸（今の東京）・関東平野を知りません。実は今の埼玉・東京の低地は、その頃は、葦（あし）が生い茂る湿地（縄文時代は海がさいたま市付近まで入り込んでいたくらい、関東には低地が多い）が広がっていました。そして二大大河の利根川と荒川は埼玉・東京の中央部を流れ、江戸湾（東京湾）に越谷付近で合流して注いでいたのです。この二大大河が洪水を繰り返し、低地では安心して定住したり農業をおこなうことができなかつたのです。また、今の東京の中心部は湿地帯で、江戸の町は埋め立てしなければ造成できませんでした。（今、話題の本「家康江戸を建てる」 門井慶喜 祥伝社 直木賞候補作 2016年2月発売）

ということで、家康の最初に取りかかった大仕事は関東の支配者として立派な江戸城を築くことではなく、安心して人が住め、物資が容易に運べ、米作ができる平野部の造り替え（大治水・利水事業）だったのです。

3 伊奈氏による治水事業と利根川東遷（とうせん）・荒川西遷（せいせん）

家康の命を受けてこの大改造事業を行ったのが、関東代官頭の伊奈備前守忠次（いなびぜんのかみただつぐ）でした。今の伊奈町（伊奈氏から伊奈町となった）に本拠地を置いていました。そして利根川を、1594年から数次の瀬替（せがえ・川筋変更）工事により、1654年江戸湾から太平洋へと流路を替えました。これが利根川東遷です。また荒川も1629年に熊谷付近で締め切られ、入間川に導かれました。以後入間川が荒川本流となりました。これが荒川西遷です。これらの工事は伊奈氏一族が約60年にわたり行いました。今の古利根川や元荒川という名で分かります。

4 伊奈氏による見沼溜井（みぬまためい）の築造

利根川・荒川の瀬替えは、流域の水不足を招く恐れがあったため、伊奈氏は用水路や溜池を各地に築きました。今の見沼たんぼの一角には、見沼溜井が築かれました。1629年今の緑区大間木付近に八丁堤（はっちょうづつみ・約870m）と呼ばれる堤防を築いて沼地を巨大な溜池にしたのです。水深約1m、周囲40数km、面積約1200ha（今日本で26位の印旛沼の次にあたる広さ）、灌漑面積約5000ha、今の足立区まで潤しました。

5 見沼溜井の問題

八丁堤下流の開発が進む中、見沼溜井は周囲の台地からの排水や湧き水の流入しかなかったり、土砂の流入で貯水能力が次第に低下したりして、下流の水不足の問題が起きてきました。また、大雨後見沼沿岸地域の田んぼが水没する問題も起きてきました。1673年や1701年には荒川や利根川から水を引き入れる案が出ましたが、実現しませんでした。

6 見沼代用水と見沼たんぼの誕生

ここで登場するのが、享保(きょうほう)の改革を行った江戸幕府八代将軍の徳川吉宗です。この頃幕府は極端な財政困難(お金がない)でしたが、吉宗は新田開発による年貢米の増収をはかりました。そうなれば水深が浅くて干拓しやすい広大な見沼溜井が見逃されるはずはありません。吉宗は出身地紀州(和歌山県)の土木事業で活躍した井沢弥惣兵衛為永(いざわやそべいためなが)を起用して新田開発を行わせ、見沼たんぼの誕生となるのです。

彼は干拓するために、見沼溜井の八丁堤を切り割り、見沼の水を芝川から荒川へと排水しましたが、溜井に代わる新たな水源として利根川から取水する見沼代用水を築いたのです。

見沼代用水は今多くの用水が取水している行田市の利根大堰(とねおおぜき)の位置から取水し、最長約60kmの用水路です。1727年8月に着工し翌年3月には通水しています。つまり6か月で完成しているのです。この工事は弥惣兵衛ら幕府側の役人と水路沿いの村々の人々が協力して行い高低差があまり無い地形に水路を築く難しい工事にもかかわらず、短期間で完成させました。この代用水は、実は今の2倍の幅があり、水源としてだけでなく、江戸までの舟運の運河としても非常に利用価値の高いものでした。

見沼たんぼは高い所を流れる東縁・西縁の代用水から水を取り入れ、低い芝川に排水をしています。代用水は遠く利根川から一滴の石油も電気も使わずに自然の力だけで流れ、田畑を潤すだけでなく都市住民に飲み水も提供しています。

7 見沼代用水の主な構造物(現地で見よう)

- ・元坎(もといり) ・八間堰(はっけんぜき) ・十六間堰
- ・柴山伏越(柴山伏越) ・瓦葺掛渡井(かわらぶきかけどい)
- ・見沼通船堀(みぬまつうせんぼり)

8 見沼たんぼ

江戸時代、こうしてできあがった「見沼たんぼ」は、約12平方kmの新田となりました。七里あたりはすぐそばを日光御成道が通っていますから、鷺(さぎ)や田んぼを将軍達も眺めたことでしょう。見沼以外にもこの代用水から多くの水路が築かれ、多くの新田が生まれました。高度成長による都市化の中、消滅の危機がありました。洪水被害を和らげる貯水機能・首都圏の広大な緑地の大切さから、県により1965年「見沼三原則」が定められ、見沼たんぼは開発から守られることになりました。そして、今多くのボランティアが保全のための活動をしています。

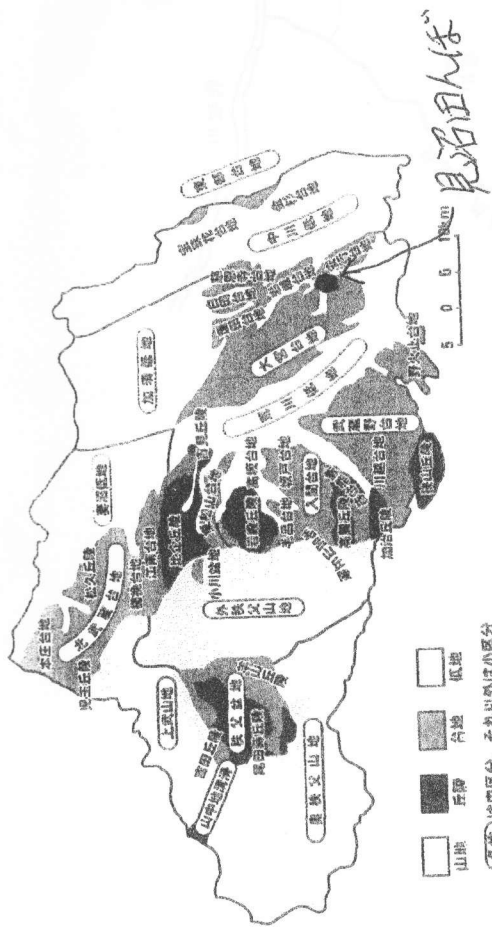
<参考資料>

- ・見沼たんぼホームページ(ここから様々な情報を得られます)
- ・見沼見て歩き(npou 見沼保全じゃぶじゃぶラボ編)
- ・見沼のうつりかわり(浦和市立博物館発行)
- ・見沼たんぼ見どころガイド(さいたま市発行)など

▼縄文時代の海岸線と貝塚の分布



(「埼玉県立博物館展示総合案内」)



埼玉県の地形分類図¹⁾

埼玉県の地形

埼玉県の地形と断面図

